

## 【研究ノート】

シベリア抑留死の意味を求めて  
——妻と娘の記憶と語りから——

桜井 厚

## はじめに

あるとき知人の遠藤和枝さん（1936年生）から、シベリア抑留中に亡くなった父、福田孝に関する手紙が三通残されているのでどうしたらよいか、と相談を受けた。私が個人的記録や口述資料のアーカイヴ化を進めたいと考えていることを知ったことだった。この話と相前後して、舞鶴引揚記念館の資料が戦後70年を迎えた2015年にユネスコ世界記憶遺産に登録された。遠藤さんは、そこも訪ねて見学したものの引き揚げ者の記録資料が中心であることや手紙三通のみということで、その保管や今後の取り扱いの相談をすることもなかったようだ。早速、その三通の手紙がどのようなものかを聞いてみると、三通の手紙は抑留中の父からの直筆の手紙ではなく、シベリア抑留から引き揚げた三人が、母の問合せに対して父の抑留中のことや死亡の状況を伝えたものだった。父の生前の記憶をもつ人は、もはや遠藤和枝さんしかいない。その遠藤さんも幼年期に終戦直前に徴用された父と満州で別れたきりである。母や幼いきょうだいと引き上げてきて気丈な母に育てられたが、その母もすでに他界している。高齢になり自分の人生の来し方を振り返ると幼くして別れた父のことが追慕されるのも無理がない。実際、彼女は数年前に「厚生労働省ソ連抑留中死亡者慰霊巡拝（沿海地方）巡拝団」に加わって、シベリアを訪れている。そうした遠藤さんの思いを受けとめて、父である福田孝のライフヒストリーを描きつつ彼の抑留死とは何だったのかを考えはじめた

のであった。

ところで、遠藤さんの手元には父の自筆の個人的記録は一切ない。日記も手紙もまったく書かなかったのだろうか。満州時代にいくらか残されていた個人的記録の類が敗戦後の引き揚げの慌ただしさのなかで失われたのかもしれない、あるいは満州時代に仕事に追われてほとんど文章を認める余裕はなかったのかもしれない。母、福田三枝が実母に宛てた手紙や戦後、唄を始めて歌集や自分史を自家版などで出していて、たくさんの個人的記録を残しているのとは大違いである。福田孝自身の自筆資料によらずに彼のライフヒストリーをどのように跡づけることができるのか。考えられる有力な手法は関係者からの聞き取りである。しかし、今となっては当時の関係者で該当するのは遠藤和枝さんただ一人である、しかし、遠藤さんは幼かったから満州時代における父に関する思い出が希薄である。母は多くの個人的記録資料を残しているので、それによって夫、孝に関する記述をある程度参照することはできる。そのほか明治期に満州に渡って運送業の事業を始めた孝の父、福田寅一の伝記的な記録がある。それらを参照しつついくつかの戦後の出来事を重ね合わせながら、父の死の意味を探し求める遠藤和枝さんと同行するつもりで、福田孝という一人の兵士の抑留死の道筋を描く試みを始めたい。

なお、以下の記述では、歴史の断片を語る資料的に意義深いと認められるものは、できるだけそのまま全文を引用した。また固有名詞は、遠藤和枝さんと相談の上、既に他界した関係者について

は実名（敬称略）で、地名はすでにほとんどが変更されていることを考え当時の資料通りに記述することにした。また、手紙文などには誤字、宛字などが多いが、原文通りに記述した。なお、筆者の注記、補記は〔 〕内に記した。

## 1 三通の手紙

福田孝のシベリア抑留中の死の状況を知らせたシベリア抑留者の手紙は、どのような経緯で妻である福田三枝のもとにもたらされたのだろうか。三枝は私家版の自伝『翔鳩——私の半生記』を1994（平成6）年にまとめている。そのなかで夫の死を知った経緯が簡単にふれられている。「〔昭和〕二十二年の春、消息不明だった主人の名が、ソ連の抑留者として新聞に出たのです。やはりソ連につれていかれたのかと、無事に帰ることを祈っていたのですが、半年後戦死の公報が入り、遺骨と遺品が届きました。身につけていたお守りと象牙のパイプ、それに手帖。手帖には子供たちの写真がはさんでありました。二十一年の三月、主人はすでにソ連で事故死していたのです」（福田三枝1994:53）。

文面では「遺骨」とあるが、正しくは「石のかげら」であった。この事実が、遠藤さんにとって父の死を受け入れることができない一因となったに違いない。この記憶からでは戦死公報が入ったのは1947（昭和22）年秋頃と思われる。翌年には福田三枝宛に大分県民生部から二通の葉書が届いている。その全文を以下に掲載する。葉書、手紙にはほとんど句読点が打たれていないが、読みやすさを優先して句読点をつけた。

【葉書1】〔消印判読できないが、1948年夏ごろと推定、往復葉書の往信〕

〔宛先〕福岡縣京都郡豊津町八條 福田三枝殿  
〔差出人〕大分市春日浦 大分県民生部世話課認定係古庄〔印〕  
謹啓

暑さ酷しき折柄貴家御一同様には御支障もなく付々生業に御精励の事と推察致します。さて御主人孝殿には終戦後状報不明にてさぞかし御心痛の事と存じます。何か復員者等からお知らせが届いては居ませんか。当課にても各方面より資料蒐集に努力致して居りますが、本籍中津市金谷二〇三九福田孝（明治41.3.28日生）留守担当者妻福田三枝、今一ツ、本籍別府市南石垣現住吉弘町三班母福田ナミエと二人の福田孝殿の届出がありますが、右の福田ナミエさんと貴女とは何か関係があるのではないかと、当課では同一ではないか思料せられます。御返事下さい。尚御主人の消息、大分縣北海部郡下ノ江村字平屋（平川昇方）飛田登殿承知して居ますから問合せ〇〇〇〇〇〇〔読み取り不能〕御願い申し上げます。

【葉書2】〔昭和23年10月28日の日付印、往復葉書の往信〕

〔宛先〕福岡縣京都郡仲津村新田原 福田三枝殿  
〔差出人〕大分市春日浦 大分県民生部世話課 古庄〔印〕  
謹啓

中秋の誠に凌ぎよき時期となりました。先般御主人の事についてそれぞれ情報提供者について照会致しましたが、御不幸にしてソ連抑留中死亡されたことが確実となりましたので近日規定によりて手続を致しますが、それについて留守宅に戦友・復員者より報告がありましたら、御知らせ下さい。尚左記の方がよく消息を承知して居ますから、御尋ねください。右連絡まで。

記

大分縣北海部下ノ江村字平屋（平川昇方）  
飛田 登

葉書1の宛先が、実家のあった豊津町であるのに対して数ヶ月後の葉書2は仲津村宛てとなっている。福田三枝親子5人は1946（昭和21）年7月15日に舞鶴に上陸、翌日、福岡県行橋町の福田家では受け入れができず、豊津町の母の実家へ向かった。しかし、母は実家ではなく、妹ともに知人の家の2階で間借り生活をしており、そこへころがりこんだのであった。その年の冬に妹が結婚し、母は妹夫婦の住む行橋へ転宅、三枝親子はそのまま知人宅の間借り生活を続け、翌年、やは

り行橋市内に転居している。三枝の自伝によると、1947年の春に夫孝の名前を新聞紙上で「ソ連の抑留者」のなかに見つけ、はじめて夫がシベリアに抑留されていたことを確認した。そして戦死の公報から1946年3月に夫が自動車事故で亡くなっていたことを知ったのだった。大分県民生部からの葉書連絡は、それから1年後のことであった。

これら三通の手紙がどのように福田三枝に届けられたのか。遠藤和枝さんは次のように推測している。

母は軍人恩給をもらうためには、そこで死んだという証拠がないといけないでしょ。だけど〔当時の〕厚生省はそういう正式な書類はないから、一緒にいた人の証言をもらってくださいっていうふうに言われたんですよ、たぶん。恩給とかをもらうために。それで、この人たちに死んだときの様子を教えて下さいって、まず母が手紙を出したんだと思うの、1人は。これは『何回も手紙を頂いて』と書いてあるから。あとの人はたぶん事務的に送ってくれたのかな。

遠藤さんの言う「1人」とは民生部が教えてくれた飛田登氏のことである。これら三通の手紙は切手蒐集のためか、いずれも切手部分が切り取られて消印が確認できないため、受取年は推定である。

宛先住所は福岡縣京都郡仲津村新田原とあり、

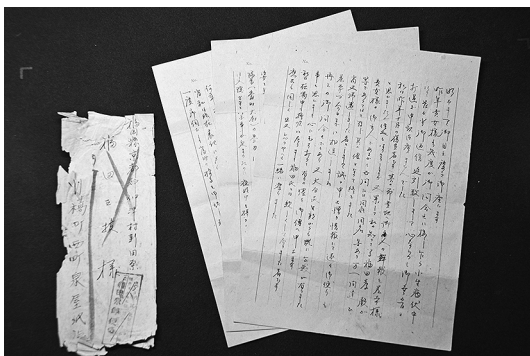


写真1 飛田登からの手紙

大きく赤い×印がつけられ、横に行橋町西町泉屋紙店内の記載があって新田原郵便局の印があるところから転送されたものと思われる。差出人は、福岡縣田川市東区松原宮町（旧称伊田町）の飛田登とある。

明けまして御目出度う御座います。／昨年貴女様より幾度か御問合せに接し乍ら小生病伏中にて長々と御返信延引致しまして心ならずも御無音を打過ぎ申訳御座いませんでした。／私は昨年十月の復員者です。其の節貴地へ御主人の詳報を差上げ様と思ひましたが住処もはっきりしませんでした、又果して私の知ってる福田孝殿が貴女様の御主人であるかも世間には同姓同名等あり、万一間違ひ等あってはと存じ其の儘となって終いました。／尚又帰還しました者として誠に申上憎き情報にて遂々御便りも差上げず今日までに相過しました。／再三の御問合せでもあり又大分県民生部からも既に公報が有りました事と思ひまして心にむち打って有りの儘をお伝へ申し上げます。／私は在満中撫順に居りまして福田氏とは親しくして居りました者です。応召も同じく且又シベリアへも一緒に渡りました。／其の上又不思議な御縁で同じくイボリトフカに収容せられ、帰還も共に手を合した仲でした。（福田寅吉様（ ）忠様、孝様、修様の御兄弟とも良く知っています）撫順からもう一人後藤組の島田君といふ人がありました。／ここまで申上げれば奥様も既に御推察遊されたことと存じますが実はああ何たる神の所為か福田孝様は不幸にも酷寒のシベリアで最愛の皆様との再会を胸に抱きしめつつ永遠の眠りにつかれました。私も当時を憶ひ胸せまる思ひです。／そうまだ残雪寒い三月でした。福田氏は農場のトラクター工場特業者として自動車関係へ勤めて居られました。毎日元気で作業を終え夕方顔を合わせては帰国の望みに花を咲かせて居りました。／然るに或日噫々何たることか自動車事故で病室に搬び入れられる御主人の姿を見ようとは……入り後は尚浅くあちらの事情に通じぬ頃とて隊長（当時大尉）の盡力にもかかわらず入院手続もはかどらぬ中、翌朝は入院さすといふ事が定まったのに夜明けを待たず午前三時頃渴望の故国を踏まづして永眠されました。誠に何と申し上て宜しいか……／当日付を以て陸軍上等兵進級を命ぜられた隊長の目にも涙がありました。／大分縣ときいて居りましたので、せ

めて帰還の時は遺骨になりとも私の手でと或時は私の枕部に遺骨を安置して居た事もありました。／然しその後小生病魔に倒れ入院しまして弱兵としてウラジオ地区付近の入院者の人々と共に病弱者梯団として今迄一緒にいた隊の人々より一足先に帰還しました次第です。遺骨は入院の際、隊全部が纏まって帰る時には奉持して帰国が認められるからといふので隊本部へ安置されました。帰還当時大分世話課でも貴住処が判っきりしませんでしたのと斯様な御報らせは御伝するのに心苦しいので心にはかかり乍らも遂々御無容に打過ぎました。／何卒不悪御寛容下さいませ。／尚私は現在表記に居住して居りますので余り遠方でもありませんから、一度御伺ひして当時の様子を御話し致し度いと思っておりますが、何様家族共々其の日其の日に追われ思ひにまかせず早やく御訪ねして詳細御伝えねばと存じ乍ら遂々延々となって終ひました。何卒更に御容諒下さいませ。／尚又以上申上りました福田孝さんなる人が御宅の御主人でなく同姓同名の人であれば……などと夢見たいな望みを持って居りますが……／乱文乱筆取止めもない事を認めましたが、宜しく御判読下さい。／生は乱筆乍ら延引御詫方々御報知まで。草々

一月五日  
福田三枝殿

飛田登

この飛田登の返信は、大分県の連絡が1948(昭和23)年であることから1949年1月5日のことと推察される。こうして福田孝の死は交通事故であることが同じ収容所にいた抑留者によって伝えられた。福田三枝は、いくつかの知人を伝手に夫の消息を尋ねていたのであろう。その後、さらに詳しい夫の死の状況が伝えられている。

三通のうちの二通目は、大分県大野郡に住む抑留者からのものである。封筒の裏に12月15日の日付らしき記載があり、文面と照らし合わせると1949年12月15日に投函されたものと考えられる。差出人は鷺上正幸、宛先の福田三枝の住所は福岡縣京都郡仲津村新田原である。

拝復 寒気益々相加りつつある折御家内御一同様益々御壮健の事と遠察致します。先日の御書面拝見致

しました。私し事御主人孝殿とは入ソ以来生死を共に致して来ました者であります。当地に居住致して居る時あれば約束致して置きながら計ずも自分一人が故国の地をふんだ事が何んだか君に対してすまない様な気が致します。／だが今こうして故郷の地に安住致し遠々入ソ当時に想ひを歩らせる時生て帰った事がむしろ不至儀な様であります。／帰郷早々御家族の皆々様に御知せ様と思ひましたが何分異国の事故住所簿を持って居りましたが全部引上げられ所がはからず心には何時も御家族様の事は想ひながらも今日&#36832;失礼致しました。悪しからず一重におわび致します。私しも去る昭和十九年一月渡満致し奉天に居た者であります。応召も君と同日同じ朝鮮に入隊致しました。家族は奉天に残して来ましたが、終戦一年後家内のみは帰って来ましたが長男が奉天にて死亡致しました。／御一同様も異国の地に於いてさだめし御苦勞なされた事でしょう。大和民族の終末。終戦。引揚と御主人の無き後さだめし御苦勞なされた事でしょう。とうていあの当時の事は内地に居る人々には味う事の出来無い事であります。／奥様お子様今私しがこうしてペンを取ってはをりますが、御主人の最後の状況をお知らせするのがなんだか恐れ様な気が致します。だがあの当時の状況をくはしくお伝え致し幾分なりとも御一同様のおなぐさみになれば幸と思ひます。／去る昭和廿年八月三日朝鮮の羅南に入隊致し十日たらずして終戦の命を受け部隊は平城に下り十月二日まで平壤に居りましたが、十月二日平壤を出発元山港に到着致し同地を十二月二十八日出港十二月三十一日ナホトカに上陸、同地に露営致しましたが、すでに零下四十五度の寒さに日本人には死よりつらい事でした。明る日当地を出発致し列車にて二日遠海州イポリトフカと言う小さな部落に着きました。着いた明る日より早速作業にかかりました。作業は主として農業の仕事ばかりでありましたが、何分寒い冬の事故冬の間は外の仕事は無く家の中のみ仕事でありました。君は在満当時自動車事業をして居た関係自動車工場に入り、私しは奉天に居て御承知の満州事業に居た関係で電気の仕事を致して居りました。作業場は同じ屋根の下共に毎日を通して居りました。同じ作業場で働く者が十三人でありました。十三人の指揮者階級が一番上だった関係で私しが指揮し者として作業を致して居りましたが、たまたま良く日時はきをく致して居りませんが、二月下旬か三月上旬だったと思ひますが当作業場より出張作業員

五名をロシア人の方から言渡され、孝殿以下四名が自動車に乗車致し約五〇キロばかりの部落まで作業に出てゆきました。何分内地の三月とは違ひ彼の地は今だ〇下四十五度五十度の寒さで防寒着を着用致して作業をするので身の自由も思う様にならず、実際にやったことのある人でなければ味う事の出来無い苦しみなのです。四時其の作業が終り帰路について約三十キロばかりの所に於て自動車が停車致しました。其の際孝君は自動車より下車致し足踏を致して居りました処、後方より来る別な自動車で孝君をあとと言う間に引倒してしまいました。其時自動車の前輪が孝君の腹の上を通りました。だが別に乗車致して居た四人の朋友がすぐ抱起し乗って居た自動車で収容所の医務室までつれて帰り早速日本の軍医が見ましたが何分腹部の事故手の下し様が無く其夜十二時に此の世を去ってゆきました。其の間私しはずと枕元について居りました。／何分異国の事故想う様に行かずに残念でした。／明る日収容所全員三八〇名でもってささやかながらも盛大なる告別式を致し日本人用の墓にいともしめやかにまいぼつ致しました。(注自動車乃運転手は全部ロシア人) 七日七日の供養は致して来ました。／月日の立つのは早いものです。それから二年、作年十一月十一日当収容所を出発致しました私し共十五名は何等内地帰国の命はありませんが何処にやられるのかわかりませんが収容所を出るに際し私しが君の遺品を持って出ましたが、はからずも内地に帰る事が出来ました。／私し達の乗った船は北海道函館港に入港いたしました 下船と同時に函館援護局に遺品は引き渡しました。もし住所がわかって居ても私しが持参致した時には何等御遺族様に金が下ら無いそうです。／援護局に於ては丁寧を取あつかって御遺族にお渡しするそうであります。／北海道函館援護局に渡したのは作年十二月五日であります。追って遺品も着く事でしょう御遺族の方方様右の様な状況であります。／今さらくいても致し方無いものです。御主人の無き後どうかお子様を大切にお力落しの無い様、敗戦後の日本、さだめしお苦しき事でしょうが、あの□の御主人が安らかに夢見る様になんばって下さい。私しもこれで福田君に対してもあの時言った言伝通り実行が出来てうれしく思っています。私しも表記に於て戦後日本再建に奮斗致して居ります。もし宇佐の方にお居出の節はお立寄り下さい。お待ちして居ります。何かと御相談がありましたら幾分なりともお力になれば幸と思ひます。／では後日又お便り

致しましょう。／御一同様の御健康をお祈り致します。  
福田様 鷺上正幸

三通目の手紙は、差出人名に三股弥作とある。手紙には5月25日の日付は明記されているものに、何年かは手紙の文面から推測するほかはない。「(昭和)二十四年でしたか下関の帰りに御伺ひ申し上げましてから二十四年の歳月が立ちました」という件があるから、時代がすいぶん下がって1973(昭和48)年ごろのことであろう。たしかに上記の二通は茶色っぽく強く触るとちぎれそうだが、この手紙は白く紙質もよい。福田三枝家族が満州から引き揚げて福岡県にいた頃、ある抑留者が訪ねてきたことを小学生であった長女の遠藤和枝さんは、以下のように記憶している。

戦後[昭和]21年に私たち引き揚げてきて、その翌年の寒いときに、このなかの一人の人が家に訪ねてきてくれて、お父さんはこういうわけで死にました、って口頭で教えてくれたんですけど、そのときのことを、私、覚えてるんですね、夜、私、寝てたんですけど、母が「起きなさい。お茶入れて」って言われたの。それで起きようとしていたら、その男の人が「いいですよ、起こさないで下さい」って言ってくれたから、会ってないんですよ、その人が止めてくれたから。声だけ聞いて。だから、そのことは知ってたんですけど、母は忘れてんのね。「訪ねてきてくれた人がいたねえ」、って後で、聞いたら。だから私、幽霊だったのかしら、ハハ、思ったりして。

この記憶の人物が三股氏かどうかは定かではないにしても、子どもの頃の記憶では1947年の冬のことで三股氏の記憶とは食い違っている。さて、三股氏は文面の中で孝の死の状況を次のように知らせている。

私も皆様の御期待に副ふべく一晩中当時の記憶を思ひ出して見ましたが、確実な資料になるものは想ひ出せないのですが、専ら覚への資料ですが、御参考になりますれば仕合せかと存じます。／二十年の十二月二十八日ソ連ナホトカに上陸しまして、二三日荷物の

陸揚をしまして、汽車でハバロフスクに行きました。／途中汽車の窓を締切って外部は一切見えませんでした。ソ連は秘密主義の国で（当地）ハバロフスクにて何時に着いたか総てが暗から暗でした。後で考へて見てあの町がハバロフスクだったのかなと言ふ程度でした。私達はハバロフスクに下車して西南西滿ソ国境線に近い方面にトラックで夕方着きました。ここは森林地帯で四方山でした。其の谷合に収容所がありましてここで六月末まで働き伐採作業をしました。

[収容所の略図については省略]

ここ [三番目の収容所] にゐる時作業が私達農作業をする者と福田さん達のやうな自動車に経験のある者とが別れました（作業が）。／以上申上げました外、人間ですが事故は福田さんが用達しのため車を停車してドアを開けて降りた瞬間後か（ら）来た車にはねられたとか聞いてゐます。／其の後の処置など聞いてゐません。／只私としては平壤に集結された時に現役の経験ある私が駆で上官から荷物の監視を命ぜられた時滿州行き最後の列車ですと知らされたとき福田さんにこんな軍隊についてゐてはロクな事はないですよ逃亡して滿州に帰ろうやとすめたのですが、福田さんが決心がつかず隊についていったので、私も一緒に行きました。こんな結果になることなら私が強引に滿州に行く事にするのでしたと今でも家内と話し合います。／平壤に集結され三合里と言ふ兵舎にて福田さんと二人になると家族の者に会ひ度ひなあと何度か語り合ひました。運命とは申せ殊に残念に思つてゐます。

これら三通の手紙から具体的な経過がわかる。福田孝は1945（昭和20）年8月5日に朝鮮の羅南で応召したが10日ほどで終戦、その後、部隊はソ連軍の捕虜となり、平壤からナホトカ経由で、1946年1月2日に沿海州のイポリトフカという小さな集落の収容所に収容された。自動車工場で働いていたものの、3月某日に運転して出かけた作業の帰り道で自動車事故に合い死亡した。孝は1908（明治41）年生まれだから行年38歳であった。福田孝とはどのような人物だったのか。ここに至るまでの福田孝家族の滿州での生活史を跡づけることにしよう。

## 2 滿州での生活

### 2.1 育った家族

数少ない資料をもとに、まず孝の生家、福田家について簡略に記すことにする。幸い資料としては、孝の父、福田寅一の若干の日記と自伝があり、寅一の死後、子どもたちの手で、それらを主な資料とした、福田脩編『明治の男の歩いた道——福田寅一の生涯』（非売品、1985年）が編まれていて参考になる。以下は、断らない限り、それを参照している。

孝は福田寅一とハツの次男として滿州の奉天で生まれた。福田寅一は大分県中津市で1879（明治12）年に生まれ、豊洲鉄道行橋駅に勤務し、駅夫を経て車掌となり23歳でハツと結婚した。一時期、妻の実家の時計店に勤めたが数年で再び直方駅に勤務、1905年渡滿の話があつて12月に渡航して輸送関連の仕事に就き、その後松茂洋行に転職した。1907年に奉天勤務となり、奉天の十間房に自宅を構えた。そこは外国人が自由に商売を営む「商埠地」と呼ばれていた地域であつた<sup>1)</sup>。翌年、孝が生まれた。「洋行」は中国において外国人が経営する商社を意味するが、寅一は、1908年に撫順駅前に松茂洋行下請けの「大同組」を開設して、家族を撫順に呼んでいる。その後、撫順を拠点に幅広く商売を営み、またいくつかの店や会社の設立に関わり、役員などを務めた。

一方、孝は1929（昭和4）年に撫順炭鉱に入社、1932年に八條家の長女三枝と結婚したのであつた。その翌年、バス・トラックの運送業を行つていた合資会社協栄会社が経営不振になり父、寅一を含む10人が出資して経営権を引き継ぎ、孝は興京の責任者になった。1939年、国策で協栄会社は奉天交通株式会社に買収され、孝は独立して山林事業に携わり杭木納入などを商いにする。

福田寅一家族は、撫順での平和な生活が次第に危うくなるのを察してか、また1941（昭和16）年に本土への移転を決意し、九男二女のうち結婚前の七男、八男、九男と次女を連れて世田谷区に

住居を求めて移住している。1945（昭和20）年5月25日の東京空襲で家財一切が消失、ハツの実家がある生まれ故郷に近い福岡県行橋へ引き揚げ、その後、終戦となって、その年、将来、農業に従事しようと決心し、生まれ故郷に近い宇佐郡駅館村の親戚を頼って移住した。1947年、ハツ死去、行年64歳。1953年、寅一死去、行年74歳。

さて、孝については、父、寅一の生涯をまとめる中心となった五男、脩が5歳年上の兄について、その腕白ぶりを記述している。福田一家は早世した人や戦病死者も含め九男三女をもうけた。男きょうだいが多いためしつけは厳しかったようで、脩によると比較的温厚な性格の者が多かったが、ただ孝は「少年時代は随分親の手を焼かせたようだ」としている。旅順中学寄宿舎在寮中には、校則違反、他校からの入学生徒や上級生との衝突などの事件を起こし、保護者呼び出しにまでなったという。「しかし、本人は馬耳東風、所業が改まらない。数次にわたる呼出に両親も出頭できかね、身内はもちろん近所の懇意な人にまで、保護者代理として足労を願うようになり、母はもう頼む人もないところばしていた」。それでも無事卒業はできたようで、脩は「不思議なくらい」だと記している（福田1985:57）。

この孝が24歳で八條三枝と結婚、その経緯は三枝の自筆の自伝や手紙からうかがうことができる。三枝の結婚後の満州での暮らしや孝との関係、そして孝のシベリア抑留死のあとの日本での生活については、すでに「ある女性の戦中・戦後を個人的記録から読み解く」（桜井2016）にまとめた。そこで、妻となった三枝にとって孝は、夫として父として、どのような人物だったのだろうか。

## 2.2 夫として、父として

遠藤和枝さんの母、福田三枝は1914（大正3）年、大分県中津市の八條家で生まれた。中津が奥平藩の城下町で、八條家は奥平藩の代代馬術師範の家柄であった。父は会社員、母は東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）を卒業後、教

師となり結婚後も中津高等女学校の教師を務めた。この頃は共働きで経済的には比較的裕福な暮らし向きだったようだ。父は単身赴任をしており、父の母である祖母が亡くなるまでの七年間、日常生活は母、三枝、そして結婚前のお手伝いさんの4人暮らしであった。母は姑の世話をするために結婚したようなものとも三枝は思っていたが、三枝の出産においても仕事を辞めることがなかったのは姑がいたおかげであったともいえよう。

祖母亡き後、三枝の一家は中津の家を出て現在の北九州市に移り、母は明治専門学校に勤務して職員住宅に住むようになり、父はそこから門司の会社に通った。その後、父が病気を患い会社勤めを辞め、自営業に転職、それにともない京都郡行橋町へ移住、母も行橋小学校へ転勤する。三枝は小学校卒業後、中津高等女学校に進学、三年生の時に地元の京都高等女学校へ転校、卒業後の進路については、三枝は進学を希望するも父が反対したので進学を断念している。このときの事情を三枝はのちに「母が女高師を出ていることに父はこだわりをもっていただようです。女は女学校だけで充分だということです」（福田1994a:28）と記している。進学は断念したものの、母の何か資格を取っておくようにと勧められ、2、3ヶ月の詰め込み勉強で小学校の教員免許の検定試験を受検、免許を取得した。この母の助言が、夫をシベリアで亡くした三枝一家の戦後生活を支える大きな助けになるとは、このときには想像もしていなかっただろう。

女学校卒業から2年後、1932年6月、三枝は見合いをして1週間後に結婚式を挙げ、10日目には関釜連絡船で下関から満州へ向かった。当時の気持ちを、三枝は夫と出身地が同じこと、小学校で仕舞を始めて親交のあった謡の先生が仲人だったことぐらいで、なぜ満州くんだりへ嫁ぐ気になったのか、「今だにその時の気持ちが自分でもわかりません」（福田1994a:29）と晩年に語る。2泊3日の旅の後、福田家のある撫順へ到着した。撫順は遼寧省の北部に位置し、露天掘りの炭鉱の

町として知られていて、南満州鉄道（満鉄）の管理下にあった。福田家は、当時、父母と別居している長男のほか、弟7人、妹1人の大世帯で、三枝は姑と一緒に、ご飯の支度、掃除、洗濯と家事に追われ、朝から晩まで舅や姑、弟妹たちとは親しんだものの、この頃はまったく夫の存在は念頭になかったという。

到着して1ヶ月後、三枝は実家の母に手紙で近況を伝えている。「こちらに着いてから、丸一月と二日、だい分様子もわかりましたけれどもまだお友達が無くて淋しゅうございます」（1932年8月12日付）と家内のことには慣れたものの外出もままならない事情を嘆いている。そんな寂しさを強く感じたのが、三枝の実家の父が通い自分も親しんでいた謡会が催されることを知って夫を誘ったときであった。

夜新聞に謡会の事が出たので、主人に参りませんかと云って見たけれど、どうしてもいやだと云いますの。日曜日の午後なんですからおひまでせうと云っても、いや用事があると。……私も少ししつこかったかもしれませんが、おこってしまって。ほんとうに悲しゅうございました。泣けて泣けて床の中で一人で泣いてをりました。（1932年8月22日付）

満州での暮らしにも慣れて、三枝にとっては、趣味や習い事に親しんだ実家、八條家の生活スタイルと新天地のそれが違うことにやっと気がついた時期といえるかもしれない。

1年半ほど夫の実家で大家族の暮らしをした後で、孝は父と協栄公司の仕事を始めたため会社の事務所で寝泊まりする二人だけの生活になった。孝は満鉄のジャズバンドの一員として日曜に練習したり、ゴルフに出かけたり、また三枝は福田家の家事から解放されて短歌会や謡曲の習いを始めたりして、つかの間の優雅な夫婦生活を送ったようだ。半年ほど後の1934年7月に三枝は第一子の男子を出産、また孝の事業拡大に伴って責任者として興京に移住した。遠藤和枝さんは興京で1936年

6月に長女として生まれた。その後、国策で会社が合併し、孝家族は再び撫順にもどり、福田家の隣で借家住まいとなった。太平洋戦争が始まる直前、福田家は東京世田谷へ移住し、孝家族は母屋に住むようになる。太平洋戦争の開戦後も、三枝が「戦時中の満州は割合のんびりしていました」（福田三枝1995:38）と記憶しているように、満州の状況が灯火管制や空襲などでほんとうに危機的になったのは戦時末期になってからであった。

福田家が引き揚げ、満州の事業を孝が全面的に引き継いで、孝夫婦の間に4人の子どもが生まれたけれども（うち第一子は4歳で病死）、夫婦間にはいくらかの軋轢があった。三枝は実家の母に「あまり御心配なさらぬやうにして下さいませぬ」と断りながらも、次のように訴える。

根本問題は主人と私の性格が相容れないというところにあるのですが、私もあまりかたくなに自分を押し通そうするわけでもないですが、そんな気持ちが全然ないとも云えません。福田のお父さんと一緒になって頭から私をおしつけやうとするのです。女故に何事も一から十まで男のする事に口出しが出来ないと云ふ規則は封建時代にもなかったと思ひます。何か云ふとえら相にするとおこり、それに反発すると殺しかねない程ひどい目に合はしますの。私も又、打たれてもけられても、そうされればされる程意地になってにげたりさげんだりしないので、それが又氣にいらぬらしい。（1943年2月5日付）

現代から見ればDVにも相当する状況もあったようだが、三枝も負けてはいなかった気丈夫な様子がうかがえる。三枝が一時内地に帰っていたとき、孝が三枝の日記を見たらしく「福田の家風に合わない」とまで言われたという。続けて、三枝は書く。

お父様のあとをとるやうになって見ると、何もかもお父様そっくり、金銭で何もかも片づけやうとする風から、勞せずして金をもうける事を考え、とばくをする、競馬に行く。何か口にするると女だと云ふ理由で頭から



押しつけだまっけてもえらさうな顔をしているとお  
こるのです。(1943年2月5日付)

「お父様」の渡満した明治時代ならいざしらず、  
「満州も建国十年、いつまでも植民地ではないと  
思います」などと生意気を言うことが気にいらな  
いらしいと、三枝は言う。ここに自分の主張を  
もっている三枝に対して、妻の夫への「絶対服  
従」を強いる伝統的なジェンダー観をもつ孝との  
決定的な差異が浮かび上がる(桜井2016)。もっ  
とも、三枝は「女て結局、つまらぬものですネ。  
さうされてもとび出しきらないのですから」と、  
離婚も頭をよぎったのかもしれないが、ひとまず  
その場でその事態を取めている。

さて、こうした夫婦関係であったが、子どもの  
目からは両親はどのように映っていたのであろう  
か。2015年のインタビュー時、遠藤和枝さんは  
次のように語っている。

父親に関しては生の記憶があるのは、私1人だと思  
うんですよ。きょうだいは皆死んじゃったし、……父は  
上から二番目のきょうだいだったから。明治41年(生  
まれ)か、弟は(応召のとき)小学校の1年生ぐらい  
だったから覚えていない、ほとんど、あんまり父のこ  
とを。

彼女に残されているのは、子煩悩な父親の記憶  
である。

父については、記憶にある限りはいい思い出ばかりで  
す。よく遊んでくれたし、スケートを教えてくれたり、  
庭に水を撒いて小さなリンクを作ってくれたり、よく  
散歩もしました。音楽が好きでハーモニカを吹いてい  
ました。

ただ、母との関係では、三枝が手紙で語るよう  
な静いを「一度だけ」見聞したことがある。

母が口答えしたとき、柔道の背負い投げで投げ飛ばし  
たのを覚えてます。私は泣きながら母に取りすがって

ました。原因は私と父が散歩に行って帰ってきたとき、  
父が言いつけていった靴を磨いてなかったことで、母  
がそんな時間なんてなかったといったからです。

### 3 応召と引き揚げ

#### 3.1 応召

孝は若い頃、柔道で腕を骨折した。そのため兵  
隊検査では丙種合格であり、徴兵は免れた。とこ  
ろが、1945年、敗戦が濃厚となった8月3日に  
撫順の自宅へ赤紙が届く。

わたし、あのとき覚えている、母がなんか緊張した顔  
で、父はそのときね、守備隊ってのがあったんです、  
住民で組織する。そこへ行っていたの。だから夜も  
帰ってこないで、そこに泊まり込んで。そこへ母が電  
話をして赤紙が来ましたとか言って電話しているのを  
覚えているんだけど。

当時、撫順の後背地にあたる東辺道一帯は、  
「匪賊」[徒党を組んだ盗賊集団で、取り締まる側  
からの呼称。日本の満州支配に対抗する非正規武  
装集団も、このように呼ばれた]が横行する治安  
の悪い地帯であった。三枝の満州の生活がはじ  
まってすぐに、実父から「匪賊」の襲撃への恐れ  
があって危険だから内地に帰った方が良いのでは  
ないかと問合せがきたほどである。実際、三枝は  
実母に向けて満州到着後に次のような手紙を認め  
ている。

匪賊が撫順の近くまできたと、二三日前から飛行機が  
しじゅうとんで来ていましたが、今日は、撫順守備隊  
は全部出て、市外近くは戦争気分ださうです。市内に  
はちょっと寄りつけませんでせう。匪賊の方に大砲な  
んかあると危険ですが、そんなものがないから大丈夫  
です。(1932年8月22日付)

関東軍の謀略によって前年に満州事変が起き、  
1932年3月には満州国の建国が宣言されている。  
三枝が満州に渡ったのは、このようなきな臭い時

期であったが、本人は、「初めて実戦音をききました、あまりこわいとは思いませんでした」と書くように、案外、あけらかんとその状況を受け止めていた。撫順守備隊は、その後、住民が交替で終戦まで務めることになる。

さて、遠藤さんによると、「そのときに召集令状が来た人、ずいぶんいたんだけど。[父は]撫順の駅から列車で出ていったんです」。それが8月4日であった。こうして、あと10日余りで終戦を迎えることも知らず、孝はお守りと4人の子どもの写真を携えて出征、朝鮮の平壤部隊に入隊したのだった。

### 3.2 敗戦から引き揚げへ

ラジオの前で終戦の詔勅を聞いたのは、それから程なくであった。脩がポツンと「兄貴も帰ってくるわ」とつぶやいたことを記憶している(福田1994a:40)。戦地にはまだ行っていないはずだから、すぐ除隊になるはずだと考えたにちがいがなかった。しかし、その後の孝は消息不明、三枝家族も満州での混乱のなかでなんとか暮らしをたて、引き揚げの話が始まったのは終戦の翌年3月のことであった。

三枝の記録からは終戦後の撫順や三枝家族の動向の大まかな様子がうかがえる。終戦直後から撫順は大混乱に陥り、軍隊用物資の略奪や郊外の日本住宅への暴徒の襲撃などがあり、街中へ逃げ込んだ日本人は公会堂や学校へ避難、三枝の自宅にも6家族が避難する事態になった。8月末にはソ連軍が進駐、略奪やレイプが行われる状況で、三枝も外出を控え、断髪して男装をした。ソ連軍進駐前に服毒自殺用の青酸カリも配られ、肌身離さず持っていたという。ソ連軍が引き揚げからは八路軍が進駐、日本人実業家などの富裕層が拉致されたようだ。撫順で成功した実業家は、ほとんどが福田寅一と同様、日露戦争後に渡満して一旗揚げようとした、いわゆる「一旗組」であった。10月の終わりになると、八路軍に代わって当時「中央軍」といわれた国民党軍がやってきて、撫

順の町にいくらか落ち着きもどったようだ。

三枝家族は幸いにも住む家があり、撫順では食糧難からも免れたようで「お金さえあれば何でも手に入った」。家財道具を売って現金に換え、同居者とともにおはぎやカレーライスをつくったり、ピロシキを屋台で、市場の入り口や街角で売ったりした。三枝個人は人形作りをして、これも不思議と売れたようだ。開拓地や暴動で逃げてきて公会堂や学校などで寝泊まりしている人のなかでは、坑内で石炭を掘り麻袋で石炭配達をして暮らす人もいて、その売り上げのお金を受け取るのは満州人というように、「敗戦で何もかも逆転してしまいました」と三枝は記す。12月には、深夜に三人組のピストル強盗に入れ、彼らの脅しに気丈夫に立ち向かったのは三枝自身だった。物は持ち去られたがけが人はいなかった。「ピストルの前では、死ぬことが恐くなかった私が、その後二、三ヶ月近く物音に怯え、押入の中に誰かがかくれているような気がしてびくびくしていました」という。この事件が和枝さんの男性観の原点になったのではないかと、母、三枝は考えている。

そのとき11才だった長女和枝が、今でもこだわり続けているには、男に対する不信感のようです。男は頼りにならない。男はいざというとき何もしてくれない、と思い込んでしまっているのです。(福田三枝1994a:47)

こうした母の娘の考え方についての理解は、このときの出来事からだけではなく、その後の和枝さんの生き方を踏まえて出てきたものだと思う。ともあれ、三枝は子どもを抱えて女一人で三人組の強盗と対峙したのであった。

さて、引き揚げの話が翌年3月頃に出てきて、開始されたのは1946年6月30日、200人が撫順を出発している。三枝一家もこの一団の中にいて、現金は1人千円だけ、腕時計は大人1個、宝石など貴金属類は何も持てないままであった。舞鶴到着は7月15日、上陸後、列車で母のいる福岡県豊津へ向かった。母は知人の家で間借り生活をし

ていて、そこへ転がり込んだ形になった。暮らしは楽ではなく内職をやったり、引き揚げ者仲間とヤミ商売を始めて、農家に米の買い出しなどに出かけている。「私は生活の為にはあらゆることをしました。恥も外聞もなく警察の取締も恐いとは思いませんでした。自分の力で生きるために、国の規則を少々破ってもそれがなんだ、私達はそうしなければ生きて行けないんだ、という気負いがあった」(福田 1994a:52) と、述懐している。

1947年に夫のシベリアでの事故死を知り、働かなければならないことがわかってから職業紹介所へ行く。働けるならどんな仕事でもという思いだったが、履歴書から教員免状をもっていることがわかり、教員不足の頃だったからすぐに行橋小学校に採用された。女学校卒業時の母の教員免許取得の助言が実ったのであった。その後の教員生活の一端は、筆者の別稿を参照されたい(桜井 2016)。

## 4 追悼の旅

### 4.1 シベリア抑留者の死

シベリア抑留中の犠牲者の名簿資料などが提供されたのは、1991年のソ連が崩壊した後のことだった。死亡者資料のお知らせが届いたのが、なんとそれから20年以上も経過した2012年であった。大分県福祉保健部高齢者福祉課長経由で、次男の福田肇宛てに厚生労働省社会・援護局業務課長名で次のような連絡があった。

#### ソ連邦抑留中死亡者資料に関するお知らせ

終戦から六十七年余りを経過しましたが、ご遺族の皆様におかれましては、ご平安のことと拝察いたしております。／さて、ソ連邦抑留中に亡くなられた方々につきまして、今日までに、ロシア連邦政府等から約4万1千名のソ連抑留中死亡者名簿等の資料を受領し、厚生労働省において保管する資料との照合を行いながら、該当者の推定に努めてまいりました。／また平成21年度には、新たに「旧ソ連邦日本人抑留者に係るカード」の写しを、ロシア国立軍事古文書館より入手

し、現在、該当者について照合調査を鋭意進めています。／その結果、福田孝様と推定される資料が確認できましたので、関係資料の記載内容をお知らせするとともに資料の写しをお送りいたします。／なお、この「お知らせ」について、他のご遺族の皆様へもお伝えいただければ幸いです。

平成24年10月17日付けである。

ソ連邦抑留中死亡者「名簿」の記載内容は、以下のようなものであった。

【整理番号 5039-0002】(別添地図参照)

- |   |        |                        |
|---|--------|------------------------|
| 1 | 埋葬地    | プリモルスク地方(沿海地方)         |
|   |        | 第14収容所・第6支部イブポリトフカ駅その1 |
| 2 | 氏名     | フクジ タカシ                |
| 3 | 生年及び階級 | 明治41年 兵                |
| 4 | 死亡年月日  | 昭和21年3月8日              |

ソ連は、抑留した捕虜から尋問などで得た個人情報情報を文書化して保管しており、厚生労働省は2005年にロシア政府から死者40,940人の個人資料の原本を撮影したマイクロフィルムを受け取っている(栗原 2009:177)。その写しは2007年から遺族に提供しており、その一環で知らされたものだった。当初、ロシアから提供された旧ソ連当時の死亡者名簿は、ロシア語を直訳した不自然なカタカナ表記であったため遺族も混乱したといわれるが、ここでも「フクジ」となっている。遺族への連絡の遅れは、こうした点とともにロシア語の翻訳作業もあって厚生労働省の照合にかなりの年月を要することになったことも一因だろうと思われる。

マイクロフィルムの個人資料の記載内容は、当時のソ連政府が抑留者を管理する目的で作成したもので、モスクワのロシア連邦国立軍事古文書館が保有していたものである。2005年以降に日本に提供された。福田孝とみられる個人資料に記載されている内容は、次のようなものだった。各資料には番号([ ]内)が付いている。

- 1 表紙 [1802 2005 1109]、2 病歴書 [1802

2005 1110]、3 死亡証書 [1802 2005 1111]、4 埋葬証書 [1802 2005 1112]、5 遺品証書 [1802 2005 1113]

ロシア語の写真資料とともに、このなかの1,3および4が日本語に翻訳されて届けられた。氏名や地名などの固有名詞は、ロシア語原本標記のとおり翻訳したとの注記があった。厚労省の翻訳版を以下に明記する。なお、収容所のある沿海州の地図が添付されている。イプポリトフカ駅は、ウラジオストクからハバロフスクへ通じる鉄道の途中駅である。

(1) 表紙 [1802 2005 1109]

公文書番号 R/14204

個人簿 No.323

第14収容所軍事捕虜

フクダ タカシ

1946年3月8日、車との衝突により死亡

OA467/II-/13600

(2) 死亡証書 [1802 2005 1111]

1946年3月8日

以下の署名するところの我々は、下記事項に関して当証書を作成した。

3月8日午前4時、農業収容所第16支部で日本人軍事捕虜フクダ・タカシが死亡した。

[出生年] 1908年(明治41年)

[民族] 日本人

[階級] 兵

[死因] 車との衝突による膀胱の破裂および腸腔炎の発症

農業収容所第16支部長上級中尉 【署名】 [姓]

登録検査官中尉 【署名】 [姓]

衛生課長中尉 【署名】 [姓]

(3) 埋葬証書 [1802 2005 1112]

1946年3月8日

以下に署名するところの我々、

1. 衛生課長 中尉 [姓]

2. 登録検査官 中尉 [姓]

3. 労働検査官 上級中尉 [姓]

は、下記事項に関して当証書を作成した。

本日、軍事捕虜フクダ・タカシの遺体埋葬が執り行われた。

[出生年] 1908年(明治41年)

[階級] 兵

[民族] 日本人

[死亡日] 1946年3月8日

[死亡場所] 農業収容所第16支部

遺体は、村から500メートル北にある区画の墓番号No.2に埋葬された。

衛生課長 中尉 【署名】 [姓]

登録検査官 中尉 【署名】 [姓]

労働検査官 上級中尉 【署名】 [姓]

厚労省から届いた原資料の写真は、ロシア語表記であったが、受取人の福田肇は家族の伝手からロシア人に英訳してもらい邦訳したものを姉の和枝さんに送ってきた。そこには厚労省が翻訳を略した「病歴書(カルテ)」と「遺品証書」も入っている。

(4) カルテ [1802 2005 1110]

福田孝 1908年生、日本人、兵士

住所：福岡県京都郡

1946年3月7日入院、診断結果は以下のとおり。

右股関節の外傷性損傷と膀胱破裂

入院時において、陰嚢の腫れ、陰茎からの出血、多量の血尿、膀胱と腸下部に激しい痛みがみられた。

／意識は朦朧。捕虜収容所の16区の医療部に16時25分入院。自動車との衝突による負傷で、後輪が轆いた。

治療：両脚に湿布、カンフル注射、安静。／しかし改善がみられず、患者は午前4時に死亡。右股関節の外傷性損傷、膀胱破裂、加えて腹膜の急激な炎症による。

二次的分利：救急の手当てをおこなったが、改善せず。

治療：両脚に湿布、カンフル注射、安静。1946年3月8日、午前4時、患者は右股関節の外傷性損傷、膀胱破裂、急性腹膜炎のため、死亡。

16区医療部主任 医療業務中尉 サイン

1946年3月8日

(5) 遺品証書 [1802 2005 1113]

1946年3月8日、我々（下記に署名）は、1946年3月8日に死亡した捕虜福田孝（日本人）の下記の品物を管理することにした。

- 1.毛皮のコート1点、2.毛布1点、3.冬用長靴1点、
- 4.夏用ズボン1点、5.ゲートル1点、6.上着1点、
- 7.帽子1点、8.暖かい下ズボン1点、9.冬用ジャケット1点、10.タオル1点

以上、計10点

16区医療部主任中尉【署名】 マグノフスキー  
 登録検査官中尉 【署名】 フォーキン  
 医療業務主任中尉 【署名】 シャラボワ  
 VHD主任 中尉 【署名】 レフチェンコ

さらに、アーカイヴ番号、R/14204の付票が付いている。そこに記載されている情報の中に、次の項目がある。

職業：運転手、戦闘部隊：歩兵、捕虜になる前の部隊：第10ガレイスコイ大隊（判別不能）、職位（肩書き）：兵士、職務：砲兵、捕虜になった場所と日付：1945年8月14日 朝鮮Hanko（?）、地位変更についての注記：1946年1月8日入所、1946年3月8日腹膜炎のため死亡

以上が、厚労省から遺族に届けられた書類である。これだけの個人に関する記録類がロシアの収容所でしっかり記録され、保管されていたことには、とくに戦時、戦後の状況の中でわが国のずさんな記録と保管の実態を考えれば驚くに値するだろう。少なくとも文面からは、一定の治療の試みがなされていることがわかる。当時の状況を想像すると、不十分だったのかもしれないが、致し方なかったのかとも考えられる。こうした理解ができるのも資料の記録と保管の意義のひとつとも言えよう。

4.2 慰霊巡拝に参加して

埋葬地の情報、遺骨収容、墓参などの実施についての歴史的経過を簡単に振り返ってみる。政府

は、死亡者氏名や埋葬地の情報提供を日ソ国交回復以来申し入れていた。これに対してソ連政府から1959年11月から1974年7月までの間、5回に渡って26カ所の墓地及び3,957名の埋葬者について通報があった。1961年に初めての墓参が実施され、1989年までに全26カ所の墓参と追悼行事を実施した。この時期は、墓参の参加者は埋葬者の遺族に限定されていた。

ゴルバチョフ大統領の来日を機に「捕虜収容所に収容されていた者に関する日本国政府とソヴィエト社会主義共和国連邦政府との間の協定」が1991年4月18日に締結され、これ以降、埋葬地資料並びに約40,000名の死亡者名簿が提供され、本格的な旧ソ連地域における遺骨収容及び墓参等の慰霊事業が行われ始めた。2012年度までに335カ所の埋葬地について墓参（慰霊巡拝）を実施している。

遠藤和枝さんは、厚労省からの正式な連絡を受けたときはすでに年齢は古希を越えていた。埋葬地も判明したことから、父の追悼のために墓参の計画を立てはじめ、2013年度の国の慰霊巡拝団への参加を申し込んだ。毎年行われている慰霊巡拝参加申込要領は、各都道府県が申込みを受け付け、参加基準を満たしている人を国に推薦するもので、旅費の約3分の1の補助がでる。遺族は、配偶者、父母、子、兄弟姉妹が該当し、応募人員が募集人員を下回った場合、参加する子・兄弟姉妹の配偶者などの参加も、旅費の補助はないものの、認められるというものであった。和枝さんは夫とともに申し込んだのである。参加希望者には高齢者も多いことから、健康状態が良好なこと、初参加となる遺族を優先すること、年齢は原則として80歳以下であることなどが条件とされる。また、参加する遺族は政府の代表という立場から、自分の肉親の戦没地点の慰霊や合同追悼式のみでの参加ではなく、全行程への参加が義務づけられている。

「平成25年度慰霊巡拝の実施に伴う参加者の決定について」が、遠藤夫妻宛に東京都福祉保健局

生活福祉部計画課から8月30日付けで送られ、参加者に決定したことが伝えられた。その書面には、埋葬地として「5039：第14収容所・第6支部イプボリトフスカ駅その1」と記載があり、備考欄に「平成10年に調査を行い、埋葬地（刑務所の所管する市民墓地内）は確認しましたが、ご遺骨を確認できませんでした。今回は、現地周辺をご案内する予定です。」と書かれていた。参拝者募集の際の日程表（案）にはイプボリトフスカ駅周辺の慰霊巡拝は予定されていなかったものの、遠藤夫妻の申込みがあったためか最終の日程表には追記されている。「沿海地方」を巡る「平成25年度ソ連抑留中死亡者慰霊巡拝日程表」は以下である。

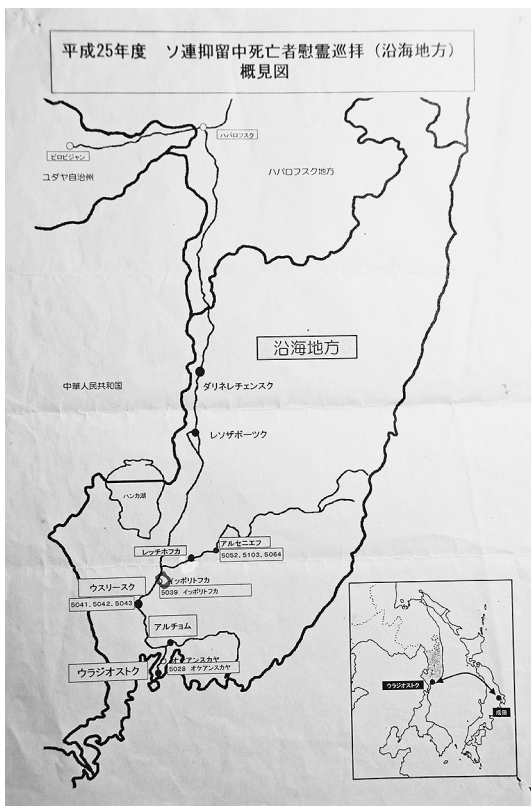


写真2 沿海地方の慰霊巡拝地図（○印がイッポートルトフカ）

- 9月25日  
【結団式】  
成田発→ウラジオストク着
- 9月26日  
【在ウラジオストク日本国総領事館表敬訪問】  
【沿海地方政府表敬訪問】  
【ウラジオストク周辺慰霊巡拝】  
5028：第13収容所第5支部オケアンスカヤ駅  
ウラジオストク発→ウスリークス着  
【アルチョム市行政府表敬訪問】
- 9月27日  
【ウスリークス周辺慰霊巡拝】  
5041：第14収容所第7支部ウォロシロフ市  
その1  
5042：第14収容所第7支部ウォロシロフ市  
その2  
【現地行政府表敬訪問】  
5043：第14収容所第8支部ウォロシロフ市
- 9月28日  
ウスリークス発→イッポートルトフカ着  
【現地行政府表敬訪問】  
【イッポートルトフカ周辺慰霊巡拝】  
5039：第14収容所第6支部イプボリトフスカ駅  
その1  
イッポートルトフカ発→アルセニエフ着
- 9月29日  
【アルセニエフ周辺慰霊巡拝】  
5064：第15収容所第14支部セチュヘ地区  
5103：第567個別労働大隊第2墓地
- 9月30日  
【アルセニエフ周辺慰霊巡拝】  
5052：第15収容所第6支部ハラザ地区  
【現地行政府表敬訪問】  
アルセニエフ発→アルチョム着
- 10月1日  
【合同追悼式】「日本人死亡者慰霊碑」前  
在ウラジオストク総領事公邸 ※昼食会

10月2日

ウラジオストク発→成田着

【解団式】

巡拝団の一行は、厚生省職員2名、通訳1名および死亡者10人の遺族12名であった。9月28日の福田孝の埋葬地へは、ウスリークスからアルセイエフに向かう途中でイブポリトヅカ〔配布された地図にはイッポーロフカの記載もある。抑留者の手紙ではイブリティフスカとなっていた。以下は、イブポリトフスカを使用する〕駅に立ち寄るものであった。この日の行程は300kmを越えるため貸し切りバスの乗車時間は7、8時間におよんだ。したがって、短時間、立ち寄ってイブポリトフカ駅近郊の埋葬地と思われる場所で慰霊の式を執り行い、和枝さんは父を追悼する挨拶をした。荒野といってよい所で墓地らしきものを特定することはできなかった。

この慰霊の旅は、遠藤和枝さんには何をもたらしたのだろうか。埋葬地は特定できなかったにしても、シベリア荒野に眠る父への慰霊の思いははたされたのだろうか。そして父への思慕をいくらかでも癒やすことにつながったのだろうか。この旅の前、厚生省から個人資料が届いた後で、遺骨収集に絡んでひとつの大きな出来事があった。

3.3 死者への思い

福田孝は福田家の次男であるが、8歳違いの弟



写真3 慰霊式で挨拶する遠藤和枝さん

に六男、稔がいる。稔は大分連隊に入営、甲種幹部候補生となり特務機関を志願して東安<sup>2)</sup>に派遣、大尉になっていた。お見合いをして1944年に撫順で結婚した、妻和歌子の記憶では、陸軍中野学校卒であったという。結婚は稔29歳、和歌子21歳であった。1945年8月4日、早朝、ソ連参戦で非常召集がかり、その日が終生の別れとなる。その時のことを妻はのちに私家版の自分史のなかで書いている。

軍人の妻の心得をいつも聞かされ、その覚悟で嫁いだ私であったが、……「和歌子は撫順に行きなさい。子供の名前を考えてなかったが、生まれたらみんなにつけてもらうように」。子供のことを言うので大粒の涙が八月のお腹の上に落ちた。「バカなぜ泣くか、誰も泣いてはおらん」。大きな声でどなられ、必死でこらえる。(東2009:12)

福田稔は「薬の包み(青酸カリ)と手のひらに入る小さな拳銃を渡し、安全弁を説明し最後はこの薬を飲むか、自分の後頭部から斜めに引き金を引くとすぐ死ぬ」と教えて出て行ったという。避難途中で自死を覚悟したこともあったが、急場をしのぎながらなんとか吉林にたどり着いて避難貨車を待っているときに、陣痛が起き、男子を出産したのであった。その後、嬰兒を抱えながらなんとか次男の兄嫁、三枝の撫順の家にとどり着いたのが11月17日、東安を出てから104日目のことであった。翌年、三枝家族と一緒に舞鶴に到着して、一端、福田の両親が疎開している大分へ立ち寄ってから自分の生家のある千葉県木更津に向かった。1948年に稔死亡の公報が届き、悲嘆のあげく結核で長く病床につくことになった。その後、病床で出会った修道士と再婚している。

稔はウラジオストクから北方にあるアルセイエフ特別野戦病院で亡くなり、そこで埋葬された。遠藤夫妻が慰霊巡拝に訪れた地でもある。2007年9月22日、厚生省の遺骨収集が行われ、遺骨は持ち帰られて千鳥ヶ淵霊園にて慰霊祭がとりお

こなわれた。このとき遠藤和枝さんは和歌子の息子宛てに、その知り合いである弟の肇を通してメールを送っている。それぞれに父への思いが率直に語られているので、ほぼ全文を掲載する。

送信日時：2010年3月6日 13:08

件名：はじめまして

突然のメールを差し上げてお許しください。私は福田肇の姉の遠藤和枝です。／このたびはお父様の遺骨が帰ってきたというお知らせに体がふるえるほど感激しました。／私たちの父親も1946年にシベリヤの捕虜収容所で死んでいます。私はずいぶん大きくなるまでいつか父親が帰ってくるのではないかと考えていました。／今父の遺骨が帰ってきたらどんな気持ちがあるだろうと考えます。

稔おじさんには、私は小さい頃からかわいがられました。一緒にとった写真もあります。いとこの中では唯一稔おじさんをして人間だと思えます。／私の父は死ぬ間際まで子供の心配をしていたと同じ収容所にいた人から戦後しばらくして聞かされました。／稔おじさんもどんなにかあなたに会いたかったことでしょう。父親の強い気持ちが今回の出来事につながったのだと思えます。

中津のお墓には石ころしかない福田孝も一応入っています。おじいちゃんおばあちゃん、それに南方で餓死した敦おじさん〔福田家七男〕も祀られています。みんな同じお墓に入るのもいいものです。

和歌子おばさんもさぞかし驚かれたことでしょう。みんな生きていればこそこんな奇跡にめぐりあえるのですね。ゆっくりお会いしてお話したいものです。

夢屋<sup>3)</sup> 遠藤和枝

このメールに対して返信が届いている。

送信日時：2010年3月6日 21:55

件名：Re：はじめまして

メールありがとうございます。返事が遅くなり申し訳ありません。／今回の事につきましては、正に夢にまで見たことが現実になりました。自分も生きていううちに、一度シベリヤへ行き、かって埋葬されている場所は知らされていたので、墓地にお参りができたらとそう願っておりました。／厚生省より最初の知

らせがあった時に、頭の中が錯乱し、びっくりするよりも気持ちが熱くなり思わず涙となりました。／すぐさま母に電話すると、もう母は感涙して話になりました。父の強い思い、母のたいへんな苦勞、私の存在、この三つがつながって、父は遺骨ではありますが日本に帰って来れたものと思います。もっと本当を言えば生きて帰って欲しかった。生きていれば、素晴らしい父であったかと。／肇様も和枝様もお父様の御遺骨が日本に帰ってこられることをさぞかし願っていることでしょう。私ばかりのことではありません。いつかきっと私のやうに御遺骨が帰ってこられることを心から願っております。／〔後略〕

〔差出人の氏名〕

遠藤和枝さんにとって叔父の遺骨が帰ってきたのは衝撃的な出来事にちがいがなかった。死んだこと証すようなものもなく、父の死を長く信じられないまま過ごしてきた身にとっては、遺骨が帰ってくることはそんな思いにひとつの区切りをつける意味があったのかもしれない。それがままたないなら、父の死の証に区切りをつけるために、待っているのではなく自ら慰霊の地に赴く必要を感じたのではなかったのか。慰霊の旅は、この出来事を契機にむしろ必然に思えるようになったとはいえないだろうか。

## おわりに

福田孝は、旧ソ連の資料から、終戦の1日前に捕虜となり、翌年1月にイブポトリフカの捕虜収容所に収容され、その2ヶ月後に自動車事故で亡くなった。あまりに短期間に、それも不運としかいいようのない巡り合わせである。またシベリア抑留では、食糧事情による飢え、極寒のなかの重労働など、数多くの過酷な状況が伝えられてきた。そうした体験があったとしても亡くなるよりはなんとか生きて帰ってきてほしかったというのが遠藤和枝さんをはじめ、家族の思いなのだろう。

ただ、もう四半世紀前になるが、ゴルバチョフ大統領が持参した抑留死亡者名簿に「ばかばかし



い。いまごろになって、父の名前をリストに見つけたってどうなるものでもありません」(枝川 1991:466)と遠藤さんが語ったとき、そこには戦争そのものの持つ不条理とでもいうものへのいらだちあるいは怒りが垣間見える。そのときからの思いは今も変わらない。敗戦濃厚な時期になぜ国は召集をかけたのか、あるいは1日でも2日でも早く戦争を終わらせていたら父は捕虜にならずにすんだのではないかとも思える。多摩市に住んでいる遠藤さんは、父の召集の個人的な理不尽さを戦争そのものの不条理という社会的文脈に位置づける視点から、今あらためて思う。

36歳の、4人の子どもがいる丙種合格の男に8月3日に召集令状を出した人は、本籍のあった大分県の中津の市役所の役人ですね。先日、多摩市役所に行ったとき、自治労連と多摩市の職員組合のポスターを見ました。「私たちは二度と赤紙(召集令状)を配らない」、そんな言葉でした。戦争はみんな加害者になるのですね。

遠藤和枝さんの語りは、父を知るたった一人の肉親として、次の言葉で終わった。「父は死にたくなかったらうなと思います。今でも父のことを思い出すと涙が出ます」。

#### [注]

- 1) 奉天は中国、遼寧省の省都、瀋陽の旧称。十間房は下級兵士の遊郭のあるところとして知られ、商埠地とは外国人の経済活動を保護する目的の地域である。
- 2) 満州国にかつて存在した市で、ソ連国境に接する東安省の市。市に昇格する前は東安街と呼ばれた。
- 3) 遠藤和枝さんが経営する店の名前。多摩ニュータウンができて家族で移り住んでから、遠藤さんは編み物教室などを主宰し、1980年には仲間とミニコミ誌『団地のをんな』を創刊するなどして、活動する女たちが集う場を提供してきたが、1980年代の終わりに自らの生業とフリースペースが一体となった空間として「夢屋」を開店した(枝川 1991)。高齢のため2016年閉店。

#### [文献]

- 枝川公一, 1991「光わだかまり風さまよう東京——おんなたちの「夢屋」、多摩ニュータウン」『小説新潮』9月号, 新潮社.
- 福田三枝, 1994a『翔鳩——わたしの半生記』(私家版).
- 福田三枝, 1994b『鳩のつぶやき』(私家版).
- 福田脩編, 1985『明治の男の歩いた道——福田寅一の生涯』(私家版).
- 東和歌子, 2009『沙羅の花』(私家版).
- 栗原俊雄, 2009『シベリア抑留——未完の悲劇』岩波書店.
- 桜井厚, 2016「ある女性の戦中・戦後を個人的記録から読み解く——中流階層女性のジェンダー観の一事例」『語りの地平』創刊号, 日本ライフストーリー研究所.